

論 説

ヘーゲルの反射規定と『資本論』

頭 川 博

はしがき—問題の所在

- 1 ヘーゲルの反射規定
- 2 資本と生産関係
- 3 富と貧困
- 4 資本蓄積と労働者人口の増大

むすび

はしがき—問題の所在

自然と社会から抽出された弁証法は、「量から質への転化の法則」・「対立物の相互浸透の法則」・「否定の否定の法則」の三つに帰着すると、『自然弁証法』のなかで、エンゲルスは、明言している¹⁾。ここで、ヘーゲル(1770-1831)によって展開された三つの法則のうち、「『論理学』の第一部、存在論において展開され」(『自然弁証法』(1) 国民文庫、菅原 仰・寺沢恒信訳、64ページ)た「量から質への転化の法則」は、『資本論』第I巻第9章「剰余価値率と剰余価値量」で、中世的最大限をはるかにこえる生産のための貨幣が存在してはじめて、同職組合の親方が資本家に転化できるむねの説明に援用されている²⁾。また、「全体系の構成にたいする根本法則としての役割」(同ページ)をもつ「否定の否定の法則」は、第I巻第24章第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」で、結合生産様式からうまれる社会的所有のなかになりつつ個人的所有の再建の説明にかかわっている³⁾。

これにたいして、まんなかの「対立物の相互浸透の法則」は、「彼の『論理学』のうちでもっとも重要な第二部、本質論の全体をしめ」（同ページ）るとあることから、いわゆる反射規定の別名である。ヘーゲルの反射規定は、明示的には第Ⅰ巻第1章第3節「価値形態または交換価値」で、等価物が相対的価値形態にたつ商品の価値表現に規定された契機にすぎない事柄の説明に使用されている。

本稿の問題設定は、ここからはじまる。すなわち、反射規定は、等価物が価値表現から受動的にうけとる性格にのみならず、じつは、資本イコール生産関係命題や富と貧困の関係あるいは資本蓄積にあいともなう労働者人口増加の想定にもひとしく妥当する。

たとえば、反射規定をふまえれば、資本とは生産関係だという基本命題の含意が簡単にとける。けだし、ヘーゲルの反射規定によれば、資本は、その反面での生産条件をうばわれた賃労働の存在と一義的な対応関係にあることから、それ自身がいわば他者の他者として、賃労働との内在的なむすびつきをふくむからである。そのため、資本は、対極の賃労働にたいして一つの極にたつ自立的な契機であるのに、それ自体で、労働者とのあいだになりたつ生産関係⁴⁾をあらわす。さらに、反射規定にたてば、一見労働力のもつ特有な属性にみえる剰余価値創造も、じつは賃労働を規定する生産条件の排他的所有によってもたらされた受身的な契機にすぎないゆえんが浮かびあがる。なぜなら、生産条件の排他的所有は、積極的なファクターとして、その差額が剰余価値になる労働力商品の価値と使用価値の両面を特殊歴史的に規定する因果関係にたつからである。剰余価値創造は、生産条件の排他的所有が、対極の契機をあらわす労働力商品を媒介にして、その敵対的な性格を発現させたものにほかならない。反射規定にあっては、一方の契機は、他方の契機との表裏一体の関係をふくむため、賃労働の属性は、能動的な要因としての資本によって刻印されるその社会的な産物である。また、貧困は、資本家の取得する富の労働者にたいするマイナス面をあらわす反射をなし、剰余価値をうみだす労働者サイドに、搾取の反面としての貧困がなりたつ。貧困の形成には、それに先行してその貧困を能動的に規定する富の形成が対応する。そればかりではない。賃労働は、資本の反

射規定だから、資本と賃労働とのあいだの反射関係をふまえれば、資本の自己増殖運動は、同時に労働者人口と就業者の増大をふくむことになる。つまり、マルクスは、労働者数の増加という基本前提と資本蓄積にともなう就業労働者の増大の二つをみたと、相対的過剰人口の形成をといいた。そのいみで、反射規定は、近代社会の回転軸である資本の本質的な性格から剰余価値生産、さらに資本蓄積にまでかかわる点で、第I巻の根幹部分に通底する基本原理である。もし、反射規定が資本＝生産関係命題や富と貧困の関係あるいは資本の増大に照応する労働者人口の増大の仮定にあてはまるとすれば、『資本論』研究はさらにいっそうふかまると同時に、反射規定が社会関係の面からゆたかにふくらむことになる。

それゆえ、本稿の課題は、『資本論』第I巻にそくし、ヘーゲルの発見した反射規定のもつ真価を検証し、ヘーゲル論理学と『資本論』との濃密なつながりを浮き彫りにすることにある。

- 1) 『自然弁証法』(1) 64ページ。
- 2) *Kapital*, I, S. 327, 「手工業親方の資本家への転化…単に量的な変化の質的な変化への転化の法則に関するヘーゲルの発見」(1867年6月22日づけマルクスのエンゲルスあて手紙、『資本論書簡』[2] 国民文庫, 岡崎次郎訳, 40-1 ページ, 圈点—マルクス)。量から質への転化のもっとも身近な事例は、加熱によって温度の単調な上昇をしめす水が、100℃にたつするや、液体から気体の水蒸気に一変するばあいに見られる。労働日の過度の延長が長期にわたるばあい、労働力の標準的な耐用年数がみじかくなったり、残業が1ヵ月に80時間をこえておこなわれるばあい、過労死がうまれやすくなるという因果関係も、量から質への転化の法則の具体例である。
- 3) すくなくとも論理学上の問題として、否定の否定とはなにかは、『資本論』研究上おおきな争点である。というのも、否定の否定をもって、第一の事物がそっくりそのまま第三の事物のなかになりたつ連関としてとらえるデューリング流の見地が根づよく定着しているからである。そのいみで、そもそも否定の否定とは、第一の事物がそのまま第三の事物のなかで復活することかそれとも前者のもつ本質的な要素が後者のもつ性格として再生することかは、個人的所有の再建に先行する独自の根本問題である。個人的所有の再建については、拙著『資本と貧困』八朔社、2010年、第9章を参照されたい。
- 4) 生産関係とは、生産条件の所有を基底にもち、生産活動を軸にした再生産過程での人間どうしの特有なむすびつき方である。「生産関係—人間が彼らの社会的生活過程において、彼らの社会的生活の生産において、取り結ぶ関係—」(*Kapital*, III, S. 885)。

1 ヘーゲルの反射規定

ヘーゲルは、ドイツ古典哲学の完成者である。「近代のドイツ哲学はヘーゲルの体系によってその完結に到達した。」(エンゲルス『空想から科学へ』国民文庫, 寺沢恒信・山本二三丸訳, 81ページ) ヘーゲルは、観念論の立場にありながら弁証法の基本形態を体系化した。「ヘーゲルの弁証法はすべての弁証法の基本形態なのです。」(1868年3月6日づけマルクスのクーゲルマンあて手紙『資本論書簡』[2] 121ページ)「ヘーゲルは事物(現象, 世界, 自然)の弁証法を、概念の弁証法のうちで天才的に推測した。¹⁾」(レーニン『哲学ノート』[第1分冊]岩波文庫, 松村一人訳, 181ページ, 圏点ーレーニン)そこで、マルクスは、ヘーゲル哲学から観念論的な外皮²⁾にくるまれた弁証法の「合理的な核心」(*Kapital*, I, S. 27)をとりだしてたかく評価し、「あの偉大な思想家の弟子」(*Ibid.*)であるとさえ自任した。エンゲルスによれば、ヘーゲル哲学からは、「今日でもなお人々をおどろかすほどの豊かな思想」(『フォイエルバッハ論』国民文庫, 藤川 覚訳, 17ページ)が生まれ、ヘーゲルは、文字どおり「創造的な天才」(同ページ)であった。

それでは、ヘーゲル弁証法の三本柱のひとつ、いわゆる反射規定の独創的な洞察とはいかなるものであろうか。さしづめ、反射規定そのもののもっともシンプルな説明を引用すれば、つぎのとおりである。

「上とは下でないところのものである。上は下ではないと規定されているにすぎないが、しかも下があるかぎりにおいてのみあるのである。そしてまたその逆でもある。即ち、一方の規定の中には、その反対が含まれている。父は子の他者であり、子は父の他者であって、各々はこのように他者の他者としてのみある。しかも同時に、一方の規定は他方の規定との関係の中にものみある。両規定の有は、ただ一つの存立である。父は子に対する関係を離れても独立的な或るものである。しかしその場合には父は父ではなくて、男一般である。同様に上と下、右と左もまた自己に反省した〔自立的な〕もの、関係を離れた或るものである。けれども、その場合には、単に場所一般であるにすぎない。」(ヘー

ゲル『大論理学』[中巻] 岩波書店、武市健人訳、80ページ、圏点—ヘーゲル、原著1812年刊)

ここで、反射規定は、二つの契機のもつ内的な依存性という一面とおのおのの契機のもつ自立性というもう一つの別の面の二つの構成要素からとかれていく。ヘーゲルの主張をふえんすれば、つぎのようになる。すなわち、北極と南極のような対立的な関係にあっては、一方の規定は、他方の正反対の規定と相即不離である。北極と南極との関係にあっては、一者は、おのおの他者なしにはありえず、一方の存在の条件は、その正反対の性格をもつ他方の存在であるから、両者は、切っても切れない不可分の関係にある。他方が一方にたいして、他者の他者として、一方とは正反対の契機をもってなりたつ関係は、他方が一方の性格の反射として存在するそれにひとしい。だから、一者は、それ自体で、同時に他者の存在とのつながりをふくんでいる³⁾。ところが、片方は、もう一つ別の片方との区別によって、それをはなれて自立的な存在としてあらわれる。たとえば、月光は、太陽光線の月面での反射にすぎないのに、あたかも月そのものからはっする光としてあらわれる。また、男性の存在は、女性の存在なしにはありえないのに、ひとは、じぶんが男性である事実を自己にそなわった性別として独立的に認識する傾向におちいりがちである。

それでは、なぜ片方が自立的にあらわれるかといえ、片方は、それ自身が他者の他者という特有な規定として、その相手方としての片方をつつみこむ必然的な結果、表面上、前者は、後者との関係をもたない単独の存在としてたちあらわれるからだ、ヘーゲルはいうのである。反射規定の別の呼び名が「対立物の相互浸透の法則」であるのも、片方の存在それ自身のなかに、もう片一方の契機が他者の他者としてはねかえる不可避的な帰結としてうまれる外観上の自立性に着目した命名にほかならない。

ヘーゲル哲学を継承して、マルクスが反射規定に明示的に論及したのは、等価形態の直接的な交換可能性をめぐるものであった。

「一般的直接的交換可能性の形態⁴⁾を見ても、それが一つの対立的な商品形態であって、ちょうど一磁極の陽性が他の磁極の陰性と不可分であるように非直接的交換可能性の形態と不可分であるということは、けっしてわからないので

ある。」(*Kapital*, I, S. 82)

ここで、反射規定にかんするマルクスの強調点をときほぐせば、つぎのようになる。リンネルと上着との交換取引を、前者からみれば、それが使用価値をあらわすのにたいして、後者が価値そのものをあらわし、貨幣形態の萌芽として直接的交換可能性をもつのは、交換関係にあっては、リンネルと上着がその現物形態のままでもともに価値として区別されない存在をなすためである。両者は、交換という商品どうしの特有な社会関係に起因して、使用価値の相違に關係なく、その相異なる現物形態のまま価値そのものとみとめあうつながりをもつため、リンネルにとっては、相手の上着は、自分とちがう使用価値としてではなく、自分とおなじ価値としてのみかかわりあう。上着がリンネルにたいして価値として相対するのは、リンネルとのあいだでの価値としての同等性にもとづく。上着がリンネルにたいしてあらわす価値は、リンネル自身のそれにほかならない。等価物としての上着は、リンネルに内在する価値の現象形態である。だから、等価物の上着が直接的交換可能性の形態にあるのは、上着がその現物形態でもって、リンネルの価値をうつしだすためである。「上着の等価物存在は、いわば、ただリンネルの反射規定 (Reflexionsbestimmung) なのである。⁵⁾」(マルクス『資本論第一巻初版』国民文庫、岡崎次郎訳、22 [原] ページ、圈点—マルクス)

ところが、通常、リンネル価値の反射として、上着が直接的交換可能性の形態をうけるといふ因果は消えさっている。上着の等価物存在は、リンネル商品の価値表現とは関係なしに、それ自身、使用価値の物的な属性にゆらいずるかのごとく、単独で自立的にあらわれる。思想的にふかい含蓄をもつ反射規定の発見は、ヘーゲル論理学の独自の功績にぞくする、と。

このように、マルクスは、反射規定をもって、等価物が相対的価値形態とはかかわりなく貨幣の萌芽としてあらわれる社会関係によって例解している。ちなみに、相対的価値形態と等価形態とは、不可分な契機でありながら、たがいにしりぞけあう単一の価値表現の内部の両極にほかならない。けだし、ある一商品が相対的価値形態にあるということは、別の商品が等価形態にたつことに依存する。一方、ある一商品が相対的価値形態にたてば、別の商品は、不可

避的に等価形態という対極に排除され、二つの商品は、両極端に反発しあう関係にたつからである。単一の価値表現にしめる両極は、まるで一つの磁石のプラスとマイナスのように、きってもきれない関係にありながら、おのおの反発しあう相いれない正反対の性格をもつ。

以上、本節で、二つの契機の依存性と自立性の両面からなりたつヘーゲルの反射規定をほりさげた。たしかに、反射規定は、ふかい思索にうらづけられた「画期的な仕事」(『フォイエルバッハ論』17ページ)である。

1) 「近代のドイツ哲学の最大の功績は、思考の最高形式としての弁証法をふたたびとりあげたことである。古代ギリシャの哲学者たちはみな生まれながらの、天成の弁証家であった。」(エンゲルス『空想から科学へ』75ページ)

2) 「ヘーゲルは観念論者であった。つまり、彼にとっては、彼の頭脳のなかの思想は現実の事物や過程の多かれ少なかれ抽象的な模写とは考えられないで、逆に、事物やその発展がすでに世界よりもまえからどこかに存在している『理念』の現実化された模写でしかないと考えられたのである。」(同上、82ページ)

「ヘーゲル体系によれば、理念、思想、概念が、人間の現実的生活、彼らの物質的世界、彼らの実在的關係を生産し規定し支配してきた。」(マルクス／エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』国民文庫、真下信一訳、34ページ)

3) 反射規定において一方が正反対の契機である他方をふくむというのは、両者のあいだの必然的なつながりの存在をいみする。たとえていえば、じぶんがどんな存在であるかという自己の規定も、他者の存在に照らさなければなりたない点で、それ自身、すでに他者とのむすびつきをふくんでいる。そのいみで、自己認識にも、反射規定に類似した性格がある。

反射規定のうち、二つの契機の不可分性について、ヘーゲルは、つぎのようにも説明している。

「肯定的なものと否定的なものとは、したがって、本質的に制約しあっているもの、相互関係においてのみ存在するものである。磁石の北極は南極なしには存在しえず、南極は北極なしには存在しえない。磁石を切断すれば、一片には北極が、他方には南極があるというようなことはない。同様に電気においても、陽電気と陰電気とは独立に存立する別々の流動体ではない。一般に対立においては、区別されたものは自己にたいして単に或る他物を持つのではなく、自己に固有の他者を持つのである。普通の意識は、区別されたものは相互に無関係であると考えている。…例えば、われわれは無機的自然を単に有機的なものと別なもののみみるべきではなく、有機的なものに必然的な他者とみなければならぬ。両者は本質的な相互関係のうちにあり、その一方は、それが他方を自分から排除し、しかもまさにそのことによって他方に関係するかぎりにおいてのみ、存在するのである。」(ヘーゲル『小論理学』[下

卷] 岩波文庫, 松村一人訳, 31-2ページ, 圏点—ヘーゲル, 原著1817年刊)

- 4) 一般的直接的交換可能性の形態とは、「絶対に譲渡されうる商品」(*Kapital*, I, S. 124) つまり「商品の絶対的な形態」(*Ibid.*, III, S. 342, S. 611) とおなじである。
- 5) 「一商品の等価形態は, 他の諸商品の諸関係の反射 (Reflex) である。」(『資本論第一巻初版』, 33 [原] ページ)

2 資本と生産関係

前節では, ヘーゲル論理学の三大支柱の一つをなす反射規定とはなにかをあきらかにした。ところが, 反射規定をふまえれば, 資本とは生産関係だというマルクスの根本命題のふくむ深遠な含意がたなごころを返すようにとける。そこで, 本節では, 反射規定に立脚して, 資本とは生産関係だという根本命題のほんらいのいみをとく。

資本とは, 古典派のいうように, 「蓄積された労働」(リカード『経済学および課税の原理』雄松堂書店, 堀 経夫訳, 410 [原] ページ) ではなく, 本質からみて生産関係であるというのが, マルクスの根本的な立場である。

「資本は物ではなく, 一定の, 社会的な, 一定の歴史的な社会構成体に属する生産関係 (Produktionsverhältnis) であ(る)。」(*Kapital*, III, S. 822)

ここで, 資本は, 一方の極にあって, 他方の賃労働¹⁾を対極にもつ自立的な契機をあらわす。だから, 資本とは生産関係だという命題をふかめる根本前提は, 対極の賃労働と相対する一極の独立的な存在としての資本が問題の対象だという点にある。換言すれば, 資本イコール生産関係という命題の解決にあたって, その資本に賃労働をくわえてかんがえたとすれば, そこには, 問題の所在のとりちがえがあることになる。資本と賃労働は, 資本家と労働者とのあいだの生産関係である事実をだれも否定しない。磁石のプラスは, マイナスと反発しあう正反対の契機であるとおなじように, 資本は, 他方の賃労働の対極にたつ一方の自立的な契機として存在する。

それでは, いったい, 賃労働に対立して存在する資本は, 単独で, なぜ生産関係なのであろうか。それを解決する鍵は, ヘーゲルの反射規定にある。すなわち, それによれば, 磁石のプラスとマイナスのような対立的な関係にあっ

ては、一方の規定は、他方の正反対の規定と独特なむすびつきの仕方をもつため、前者は、後者が存在する事実を同時にいみする。だから、一方の規定は、それ自体で、他方との特有な連関をふくんでいる、という。

そこで、資本にそくして反射規定を具体的にふえんすれば、つぎのようになる。資本とは、その生成が生産条件と労働者との歴史的な分離過程である本源的蓄積によって端的にしめされるように、排他的な所有になる生産条件（生産手段プラス生活手段）である。本源的蓄積は、独立生産者のあいだに分散した生産条件の独占的所有をつくりだし、少数の人々の手もとに集積した。資本は、古典派の定義するように、超歴史的に存在する生産条件＝「蓄積された労働」ではなく、その素材的実体としての生産条件が排他的に所有されてはじめてなりたつ。だから、資本はなぜ生産関係かとう問題は、いいかえれば、排他的所有になる生産条件が生産関係に帰着するのはなぜかをとくことにひとしい。結論をさきまわりしていえば、自立的な性格をもつ資本が生産関係であるゆえんは、生産条件の排他的所有がそれから排除された賃労働とのつながりを必然的にふくんでいる点にある。一つの社会のなかにあつて、生産条件が一部の人々の排他的所有物になるという特有な契機は、のこりの大多数がその生産条件の所有から除外される正反対の契機と一心同体である。生産条件の排他的所有の存在は、同時に、それから除外された賃労働の存在をいみする。したがつて、生産条件の排他的所有は、それ自体で、そこから排除された賃労働との連関をふくんでいる。生産条件の排他的所有で表現される資本が生産関係であるのは、磁石のプラスがマイナスとのつながりを内包しているのとおなじように、その排他的所有がそこから排除された賃労働との関連のなかでのみなりたつ事実起因する。だから、資本とは生産関係だという命題は、反射規定をかえりみれば、容易に理解される。資本がなぜ生産関係かという問題は、独立した存在である貨幣がなぜ「社会的生産関係」(*Kapital*, I, S. 97)の表現かという問題とおなじである。貨幣や資本が生産関係を表現する問題はともに、ヘーゲルの反射規定を通有している²⁾。

以上、本節で、反射規定の見地になつて、賃労働と対立的な契機である資本がそれ自身で生産関係に帰着する理由をといた³⁾。

- 1) 「賃労働という言葉でわれわれが考えているのは、資本と交換され、資本に転化され、資本を増殖する、自由な労働のことだけである。」(MEGA, II /3・1, S. 120)
- 2) 『資本論』第I巻第10章に登場する物質的な生産方法としての「生産様式」(*Kapital*, I, S. 333)についても、資本とおなじ原理があてはまる。「生産様式」は、具体的には、協業や分業を基礎とする工場をいみする。工場は、生産条件の排他的所有を前提になりつつから、生産様式は、特定の規定がなくても、資本とおなじように、それ自体で生産関係をあらわす。

ちなみに、マルクスは、工場内分業にかんしてつぎのようにいう。「貨幣は、一つの物ではなくて、一つの社会的関係である。貨幣の関係が、他のあらゆる経済的関係、たとえば分業などと同じように、一つの生産関係であるのはなぜか？」(『哲学の貧困』国民文庫、高木佑一郎訳、115ページ、圈点一頭川)

無規定の生産様式が生産関係を表現しているとするれば、第3篇と第4篇との関係にあらたなスポットライトがあたる。なぜなら、第3篇と第4篇とは、おのおの資本主義的生産関係の二面である資本と賃労働の対立的な関係という基礎的な一面と生産条件の少数者への集積という追加的な一面とに対応することになるからである。また、無規定の生産様式が生産関係の表現ならば、資本主義の高度な生産力は生産条件の所有関係の敵対的な性格にもとづくことになる。

無規定の生産様式が生産関係とは無縁のたんなる労働過程上の超歴史的な概念だという主張には、その根本前提にかくされた生産条件の排他的所有の閑却がある。

- 3) ヘーゲルの反射規定にたいして、社会関係を対象にしたマルクスのばあい、一つの進歩がある。磁石のプラスとマイナスなどの自然的な関係とちがって、マルクスの反射規定にあっては、二つの要因のあいだに、能動的に規定する要因と受動的に規定される要因との特有な関係がなりつつ。ここに、ヘーゲルにたいするマルクスの反射規定の差別性がある。

3 富と貧困

前節で、マルクスが資本を生産関係と規定した本質的な根拠をもって、反射規定を援用して説明した。本節では、さらに一歩すすんで、資本主義における貧困は、富の反射規定にはかならない関係をあきらかにする。

すでにのべたとおり、資本が生産関係だというのは、生産条件の排他的所有が労働力商品の生成を内蔵しているためである。だから、じつは、前者の生産条件の排他的所有が、剰余価値を創造する後者の労働力の特有な属性を規定する関係にある。つまり、等価物が価値表現の反射規定であるのと同様、剰余価値をうむ労働力の固有な能力は、生産条件の排他的所有がそこに反射してうま

れる社会的な産物にすぎない。貨幣商品金は、そのもつ自然的な属性によって一般的等価物になるのではなく、それ以外のすべての商品による価値表現によって、受動的に価値鏡という役割をうけとる。それとちょうどおなじように、労働力は、労働者からの生産条件の排除によって、その価値と使用価値の両面から剰余労働を支出する特有な属性を特殊歴史的に規定づけられる。そもそも、独立生産者のばあい、生産条件を所有するため、付加価値はすべてみずからの再生産にようする必要労働をなし、剰余労働をふくまない。だから、たんなる商品生産の前提上では、労働力は、それ自体としては、剰余価値をうみださない。ところが、資本主義の基礎の上では、労働者と生産条件との分離に対応して、労働力の価値は、その再生産にようするだけの必要労働の分量に圧縮される一方、労働力の使用価値は、その1日の使用権の資本家への帰属によって、必要労働をこえて消費される特有な属性を付与される。労働力が剰余価値をうむのは、生産条件との分離が、労働力の価値と使用価値との両面に、正反対のベクトルをもつ作用をあたえるからである。その差額が剰余価値になる労働力の使用価値と価値とは、ともに資本によってもたらされる社会的な被制約性である。したがって、労働力のもつ価値増殖能力は、生産条件の排他的所有がもたらすその反射規定にほかならない。剰余価値をうむ属性を労働力に内在する固有の能力とみなす見方は、貨幣のもつ直接的交換可能性を金のすぐれた自然属性にもとめる立場とかわらない。けだし、前者にあつて、剰余価値創造の根拠が労働力そのものの属性にもとめられる点で、後者の貨幣のもつ直接的交換可能性が金の自然属性にもとめられるのと同じ性格をもつからである。剰余価値をうむ属性は、労働力それ自身に直接起因するのではなく、それを商品へ転化させる生産条件の排他的所有によつてうまれる。等価物が価値表現に規定されるその反射であるならば、剰余労働を創出する労働力の特有な属性もまた、対極に賃労働をもたらす生産条件の排他的所有という一極の反射である。ヘーゲルの反射規定は、等価物だけでなく、剰余価値を創造する労働力の独特な属性にもひとしくあてはまる。

これと同様、富と貧困との関係にも反射規定があてはまる。資本主義最大の否定面である貧困は、能動的な契機としての富のもたらす反射にほかならない。

マルクスは、『資本論』第I巻第23章「資本主義的蓄積の一般的法則」で、「資本の蓄積に対応する貧困の蓄積」(*Kapital*, I, S. 675)を定式化した。一方の極での富の蓄積は、同時に反対の極での、…貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道徳的墮落の蓄積なのである」(*Ibid.*)とあるように、富の蓄積の反対の極に、貧困の蓄積がなりたつ。だから、前者の反射としてはじめて、後者がなりたつ。そうだとすれば、さかのぼって富そのものの反面に、労働者の貧困がなりたつことになる。つまり、資本主義の発展とともに蓄積される貧困は、資本家が労働者から取得する富の反射規定としてなりたつ。先行研究における貧困概念の欠如の一因には、反射規定の認識のうすさがあると推論される。

すなわち、商品は、資本主義社会における富の基本形態である¹⁾が、資本主義に特有な富は、商品形態をとってうまれる剰余価値である。ところが、ブルジョア的な富としての剰余価値は、その分量だけ付加価値から労働者の取得分をおしさげる。労働者は、生産条件の喪失にともなう必要労働の圧縮とそれをこえる労働日の延長という正反対の方向性をもつ作用によって、剰余価値をうみだす結果、搾取がないばあい比してその分量だけ、物質的狀態がおちこむ羽目になる。マルクスの貧困概念のもつ決定的な特色は、富という積極的な契機の対極に同時に刻印されるその反射として、貧困をとらえる点にある。富の形成の反面に貧困をみいだすのは、ほかのすべての立論と絶対的に区別される『資本論』のいわば専売特許である。

ひらがえっていえば、第23章の貧困の蓄積にかんする先行研究の壁の一つに、貧困をもって積極的な要素としての富の反面とみなすヘーゲルの反射規定の認識不足があるとおもわれる。ヘーゲルの反射規定認識が確立しておれば、富の蓄積に対応して貧困の蓄積がなりたつ。だから、資本家サイドに形成される富の反射規定として、労働者サイドに貧困が受動的に成立するという見地に、それほど困難なしに到達できると考えられるからである²⁾。そのいみで、ヘーゲルの反射規定は、それ自体、『資本論』研究にとって独自の価値をもつ弁証法の一要素である。

以上、本節で、労働者の享受する貧困は、資本家が取得する剰余価値という富の反射規定である関係をといた。だから、ヘーゲルの反射規定は、資本=生

産関係命題のみならず、マルクスのいう富と貧困を消化するさいにも有益な方法である。

- 1) 「資本主義的生産様式が支配的に行なわれている社会の富は、一つの『巨大な商品の集まり』として現われ、一つ一つの商品は、その富の基本形態として現われる。」(*Kapital*, I, S. 49)
- 2) ヘーゲルは、その著作のなかで「富の過剰」(『法の哲学』論創社、高峯一愚訳、198ページ、原著1821年刊)にたいする「貧困の過剰」(同ページ)をととなえ、「市民社会」(197ページ)の「弊害」(198ページ)を主張している。「貧困の過剰」のおもての面に「富の過剰」をみる見方に、マルクスにつうじる考え方の萌芽がある。

4 資本蓄積と労働者人口の増大

前節では、富と貧困との関係にも、ヘーゲルの反射規定が該当する事実を指摘した。本節では、資本蓄積は、同時に労働者人口の増加をその前提としてふくむマルクスの立場をとき、そこにヘーゲルの反射規定がみられる事実を主張する。

マルクスは、『資本論』第I巻第23章で相対的過剰人口をみちびくさい、その第1節で「通常の労働供給」(*Kapital*, I, S. 641)として「労働力または労働者数の増大」(*Ibid.*)を想定した。それでは、どうして、マルクスは、相対的過剰人口をとくさい、労働者人口の自然的増加を前提したのであろうか。一見すれば、労働者人口の自然的増加の想定は、失業者の生成をとくさい、前提のなかにあらかじめ結果をセットしておく同義反復の要素だとみなされがちである。しかし、さきまわりすれば、むしろ労働者数一定の想定こそ、じつは資本蓄積という概念に背反する。

すなわち、既述のとおり、生産条件の排他的所有は、それから排除された賃労働をつくりだす。一方の極での資本の形成は、他方の極での賃労働の形成をいみする。資本と賃労働は、対立的な契機でありながら、おのおの相手をうみだしあう。「資本の条件は賃労働である。」(マルクス／エンゲルス『共産党宣言』国民文庫、43ページ)「賃労働としての労働と、資本としての労働条件とは、同じ関係の表現であって、ただそれをちがった極から見たものにすぎない。」(*Mehrwert*, *MEGA*, II /3・4, S. 1491)したがって、資本がその反射として賃勞

働をうみだすとすれば、片方での能動的な契機としての資本の蓄積は、同時に他方での賃労働の増大をつくりだす。資本は、賃労働の分量をふやすことよってのみ、さらにいっそう増殖することができる¹⁾。以前に比して一回りおおきな資本規模は、以前にくらべ一回りおおきな賃労働と連動する。まさしく、資本蓄積すなわち資本の増大は、資本へ再転化される剰余価値の母胎としての賃労働の増加にひとしい。「資本がふえるのは、プロレタリアートが、すなわち労働者階級がふえることである。」(『賃労働と資本』国民文庫、村田陽一訳、51ページ、全文圏点)「労働力の再生産は、事実上、資本そのものの再生産の一契機をなしているのである。つまり、資本の蓄積はプロレタリアートの増殖なのである。」(*Kapital*, I, S. 642)「資本の増大とプロレタリアートの増殖とは、同じ過程の対極的に分かれた所産だとはいえ、同じ過程の共属的な所産として現われる。」(『直接的生産過程の諸結果』国民文庫、岡崎次郎訳、493 [原ページ、圏点—マルクス)資本の存在の反射として、賃労働がなりたつとすれば、資本の増大の反射として、労働者数の増加がなりたつ。だから、資本蓄積にともなう労働供給増加の想定は、さかのぼって、資本の反射として賃労働がなりたつ両者の背中あわせの関係にもとづく。資本蓄積に随伴する労働供給不変の想定は、資本と賃労働とのあいだに成立する反射規定に背をむけた必然的な帰結である。労働者数不変の仮定の理不尽さは、失業者の創出を資本蓄積にともなう就業者(可変資本)の減少からみちびく立論に拡大再生産される。労働者人口不変の仮定にあっては、「資本と労働との同一性」(*Mehrwert*, *MEGA*, II /3·4, S. 1390, 圏点—マルクス)が本源的に理解されていない。

以上、本節で、賃労働の存在は、論理的に先行する積極的な契機としての資本の反射であるとするれば、労働者人口の増加は、資本の増大とリンクしたその反射である関係を主張した。だから、資本蓄積の基礎上での労働者人口増加の仮定にも、ヘーゲルの反射規定が妥当する。

1) 「人口の増加は、絶えず進行する蓄積過程の基礎として現われる。しかし、それは、労働者人口の再生産だけでなくその不断の増大をも許す平均賃金を前提するのである。」(*Mehrwert*, *MEGA*, II /3·3, S. 1101, 圏点—マルクス)

むすび

本稿で、『資本論』第I巻を対象に、資本＝生産関係命題や富と貧困の関係あるいは資本蓄積にともなう労働者数増加の仮定の基底に、ヘーゲルの反射規定がよこたわっている深層を分析した。

最後にいえば、「資本と賃労働との社会」(*Kapital*, I, S. 191)の研究書がもつ『資本論 (*Das Kapital*)』という表題は、一方の資本がそれ自身のうちに賃労働の存在を反射規定としてふくむ事実にゆらする。だから、資本が賃労働を反射規定にもつかぎり、*Kapital und Lohnarbeit*と名づけるのも、*Das Kapital*という表題をつけるのも、その対象領域は同一である。それとおなじように、「資本および賃労働の生成史を形成する歴史的過程」(*Grundrisse*, MEGA, II /1・2, S. 393)をとく第24章の表題が「いわゆる本源的蓄積」であるのは、本来的には資本そのものの生成をあらわす一方の本源的蓄積が、それ自身のなかに生産条件から分離された賃労働者の形成をその反射として包含するためである。本源的蓄積をもって、ひとが資本と賃労働の両契機の形成をおもいうかべるとすれば、そこには暗黙のうちに反射規定の認識があることになる。本源的蓄積は、それ自身、直接には生産条件の排他的所有である資本の歴史的な生成をいみするにすぎない。第24章表題の本源的蓄積が賃労働者の誕生というもう一方の契機もふくむのは、資本の反射規定として賃労働がなりたつ関係に起因する。だから、第24章表題の本源的蓄積そのものが、じつは反射規定を内包しているのである。

